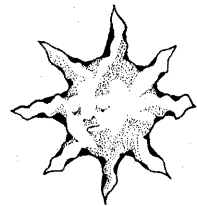


翼ある言葉をかけて

—ホメロスの『オデュッセイア』

(松平千秋訳)

川端 康雄



ホメロスの叙事詩、とりわけオデュッセイアはわたしの偏愛する物語の一つで、おりにふれて味わい親しんでいます。これを松平千秋の翻訳（現在は岩波文庫に入っています）で最初に読んだときの不思議な読後感はいまでも忘れられません。不思議、というのは、当時は近代小説ばかり読んでいたためなのかもしれませんが、そうした小説

では経験できないような精神状態をオデュッセウスの漂流冒険譚はもたらしてくれたからです。具体的にお話する前にまず他人のホメロス経験を引き合いに出しておきたいと思います。

先年他界した文芸評論家の寺田透さんは、少なくとも二回、原書でホメロスの叙事詩の全編を読み通していたようです。「ホメーロスに親しむ」

（『語らぬ筈の自分の事ほか』筑摩書房、一九八三年）というエッセイに書いていますが、定年の六年前に東大教授を辞して「自由業」になってから、毎朝テキストを二三ページずつゆっくりと翻訳するのを日課にしているうちに、ホメロスを読まないとしごとをするための気分も頭も調わないという感じになったのです。「では一体どんな気分や頭の状態なら、しごとに向いたと自分を感じることができるのか。……一言で言へば、頭が自在にはたらくやうになつてゐるといふ自覚が持てること……さういふ風にしてもらへる点で、今のところ、僕にはホメロスにまさるものがない。」「読むものの精神を解放し、自由を味はせるやうにはたらく」、そういう機能をホメロスの叙事詩もついているという指摘です。

わたし自身は、時間も語学力も満足になくて、寺田さんのようにホメロス全巻を原書で読み通すことはまだ果たしていません（老後の楽しみにで

きたらいいとは思っています）が、以前イリアスの原典講読に参加して部分的に読んだことがあり、そのときのことを思い出すと、講読が終わつての帰り道はいつも、軽やかで麗らかな気持ちになつていたものでした。物語の自身のみならず、力強く単純な構文の性格そのものに、そうした解放感をもたらす力がたしかにあるのだと実感しました。

松平訳はそうしたギリシア語原典のもつ力を極力日本語に移しえた名訳であると思います。「エピトン」の訳し方を見てもそれが言えます。「エピトン」というのは、物語中でくりかえし使われる形容語句（一種の枕詞）のことで、「アイギス持つゼウス」「眼光輝く女神アテネ」「駿足のアキレウス」「白い腕の女神ヘラ」「洞ほらなす船」「翼ある言葉」「葡萄酒色の海」などのように、キャラクターや事物につけられ、独特な気分とリズムを作りだしています。ホメロスの近代語訳は



「逐語訳」か「自由訳」かの二つの類型に分かれるそうです。松平訳はむしろ前者で、比喩表現はそのまま生かして訳すやり方を採っています。たとえば夜明けの表現としてくりかえし出てくる表現は「朝のまだきに生れ指ばら色の曙の女神が姿を現わすと」と訳されています。自由訳にするなら「朝になると」ですみます。じつさい夜が明けたという情報が第一なのであるし、それで翻訳を簡略にできますが、それでも、薔薇色の指をした曙の女神が東の空に現れるというイメージをとばしてしまうと、ホメロスの詩の大事な部分が抜け落ちてしまうことは否めません。おなじことが、「なんたる言葉がそなたの歯垣を洩れたことか」という表現についても言えます。これにしても、要するに「馬鹿なことを言うな」の意味なのですが、「歯垣」というメタファーがこの表現の生命になっていることは言うまでもありません。他にも、「さながらそれはくのようにであった」の類の

直喩表現を何行にもわたって（たいてい、喩えられる当の対象よりも数倍も長く）連ねることがよくあり、そうした構えの大きな比喩語法も読者のびやかな気分にはさせる役割にあずかっています。それも松平訳ではうまく生かされています。

物語の自身について見ましょう。トロイ戦争が十年目にギリシア軍の勝利をもって終結し、故国イタケへの帰途についたオデュッセウスは、嵐に襲われ、さらに十年間にわたって奇怪な漂流冒険の旅をする。その間故国では愛妻ペネロペイアが求婚者たちの圧迫に耐えながら留守を守っている。ついに帰国したオデュッセウスは乱暴狼藉を重ねていた求婚者たちを退治して妻子との再開を果たす——大筋を書けばこうなりますが、そのように簡単に要約するには、オデュッセウスの漂流冒険譚はあまりにも忘れたい挿話に満ちあふれています。雙眼の巨人キュクロプスからの脱出。魔女キルケの島での冒険。冥界行。セイレンの歌

の誘惑。あるいは可憐な王女ナウシカアとのほかなロマンス——数えあげるときりがありませんが、ここではカリユプソの挿話をとりあげます。

「海の臍ほそなる、波洗う孤島」オギユギア島にオデュッセウスが漂着したとき、そこに住む女神カリユプソはかれを助けたいと、自分の夫として島にとどまるなら不死の身にしてあげようと説き、しばらく一緒にその島で暮らします。女神がオデュッセウスに惚れ込んでしまったわけですが、かれの方は懐郷の情に耐えず、結局ゼウスのとりなしがあり、出立が許されます。しかしまだ女神は未練があり、こんな意味のことを言います——
そなたは帰国を果たすまでに大いに苦しみますぞ。それを知っておれば、私とこの家にとどまり、不死の身になっていたものを。妻に再会したいと切望しておるが、姿形は私の方がずっとすぐれておるではないか。なにしろ、人間の女が容姿で女神にかなうはずもないのであるから。

それに対して「智謀豊かな」オデュッセウスは答えます。松平訳で引用します。

「尊い女神よ、どうかそのことでわたしにお腹立ちになりませぬよう。思慮深いペネロペイアといえども、相対して見れば、その容貌も体格もあなたに劣ることは、わたし自身十分に承知しております。こちらは人間の身、あなたは不老不死の神でいらつしやるのだから。しかしそれでもわたしはこれまでずっと、家へ帰って帰郷の日を迎えたいと思いつづけ、それを願ってきたのです。たとえ葡萄酒色の海の上で、どなたかの神様によって難破させられようと、艱難に負けぬ不動の心を持って耐えるつもり、すでにこれまでの波の上、干戈かんかの間で幾多の苦難に遭い、苦しみ抜いてきたわたしです。さらにそのような難儀が重なってきたとて、なんのことがありましよう。」（第五歌二一五行以下）

カリユプソのもとに滞在して八年目のことです

から、オデュッセウスは妻と最後に会ってから少なくとも一七年はたっています。このときペネロペイアは若くても三〇代半ば、あるいはもう四〇

の坂を越えているのかもしれませんが。寄る年波には勝てず、永遠の若さを誇る女神と容色を比べられるはずもなく、むしろますます両者の差は広がるばかりでしょう。しかも女神は「不老不死」という願ってもない条件をオデュッセウスに提示しています。並外れた知力と体力を備えた英雄とはいえ、死すべき存在であるのは普通の人間とおなじです。ところが、神々と同等の不滅の存在にしようという申し出にもかかわらず、オデュッセウスはここで死すべき人間世界に戻ることを欲し、その意向をカリュプソに言明しているのです。

おなじギリシア神話でも、たとえばアルゴナウトイが求める金羊毛は、不老不死の希求の象徴と見ることができますし、シユメールのギルガメ

シユ叙事詩以来、不死への激しい渴望が現代に至るまで数多の物語の一定型をなしていると言えます。

ここでのオデュッセウスの決意表明は、そうした希求とは正反対で、むしろ生成し、不断の変化をとげ、やがて老いて減んでゆく、神々の観点からすればきわめて「不完全」な人間の生に回帰してゆこうとする意志が、「翼ある言葉」によって語られているのです。こういうくぐりを見るにつけ、ギリシア神話の代表的な物語の一つとされているオデュッセウスの冒険譚は、逆説的にも、神話的主題を媒介としながら、神話からの解放をはかった物語なのではないかという感じがしてくるのです。解放感はここにも由来します。

かくして、翌朝、つまり、朝のまだきに生れしばらく色の曙の女神が姿を現わしますと、オデュッセウスはみずから筏を作りだし、五日後に美貌の仙女カリュプソに見送られ出帆します。彼

女の予言どおり、故郷に帰還するまでに葡萄色の海の上でまだ数多の苦難が待つてはいるので

すが。

(十文字学園女子大学)

人間教育のエッセンス

『シーラという子』

伊藤美奈子

敵意むき出しの目をしたちっばけな子ども、シーラ。家庭内暴力、貧困、精神的にも肉体的にも虐待を受け、愛を知らずに生きてきた六歳の少女が、初めて自分を受け入れ愛してくれる教師に出会い、堅く閉ざされた心をおさるおさる開いて

いく。その五ヶ月間の様子を、直接関わった教師自身が書き綴った話である(トリイ・L・ヘンデ著、入江真佐子訳、早川書房、一九九六年)。ある日突然、著者トリイの教室にシーラがやってくる。傷害事件を起こしたため精神病院にはい